



TITLE:

京大東アジアセンターニューズレ ター 第546号

AUTHOR(S):

京都大学経済学研究科東アジア経済研究センター

CITATION:

京都大学経済学研究科東アジア経済研究センター. 京大東アジアセン
ターニューズレター 第546号. 京大東アジアセンターニューズレター
2014, 546

ISSUE DATE:

2014-11-24

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/191266>

RIGHT:

2014 年 11 月 24 日発行 第 546 号

CONTENTS

「中国経済研究会」のお知らせ.....	2
「アジア経済開発論」研究会のご案内.....	3
読後雑感：2014 年 第 19 回.....	4
上海街角インタビュー ㊦.....	10
【中国経済最新統計】.....	13



「中国経済研究会」のお知らせ

2014 年度第 5 回（通算第 44 回）の中国経済研究会は下記の要領で開催することになりましたので、ご案内いたします。大勢の方のご参加をお待ちしております。なお、諸般の事情により、研究会の開催時間はいつもと大きく異なることになっていますので、ご注意くださいようよろしくお願いいたします。

記

時 間： 2014 年 11 月 28 日(金) 17:00－18 : 30

場 所： 京都大学吉田キャンパス・法経済学部東館地下 1 階 001 演習室

報告者： 徐 涛（北海学園大学経済学部教授）

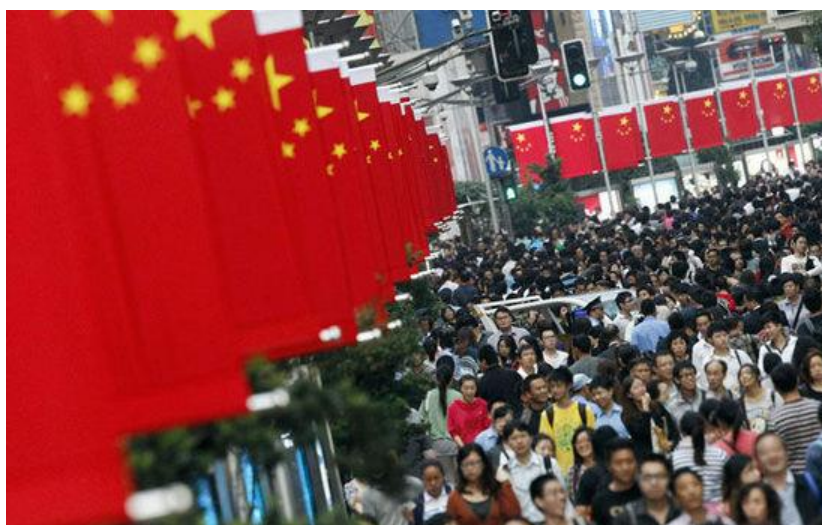
テーマ：「国進民退」は本当か

注：本研究会は原則として授業期間中の毎月第 3 火曜日に行います。2014 年度における開催（予定）日は以下の通りです。

前期：~~4 月 16 日（火）~~、5 月 20 日（火）、6 月 17 日（火）、7 月 22 日（火）

後期：10 月 28 日（火）、11 月 28 日（金）、12 月 16（火）、1 月 20 日（火）

（この研究会に関するお問い合わせは劉徳強（liu@econ.kyoto-u.ac.jp）までお願いします。なお、研究会終了後、有志による懇親会が予定されています。）



「アジア経済開発論」研究会のご案内

11月の「アジア経済発展論」研究会は、11月29日（土）に京都大学で開かれるアジア政経学会西日本大会との共催企画として開催致します。研究会は大会の企画セッションとして行われますが、もちろん、非会員の方でも参加自由です。皆様の積極的なご参加をお待ちしております。

アジア政経学会西日本大会ウェブサイト：<http://www.jaas.or.jp/pages/convention/taikai-w.htm>

研究会 website：<http://www.cseas.kyoto-u.ac.jp/~fmieno/Asia%20Economic%20Seminar.html>

アジア経済発展論研究会

（経済学研究科、東南アジア研究所、アジア研究教育ユニット共催）

■11月研究会

2014年11月29日（土）13:00-15:00

場所：吉田中央構内 法経東館（3階311教室）（下記URL地図5番のビル）

http://www.kyoto-u.ac.jp/ja/access/campus/map6r_y.htm

アジア政経学会 2014年西日本大会 企画分科会

「アジアにおける企業と経済開発—企業レベルデータによる計量的アプローチ—」共催

司会：巖善平（同志社大学）

報告1：藤森梓（大阪成蹊大学）

「インド製造業における海外直接投資のスピル・オーバー効果：企業別マイクロデータを用いた実証分析」

報告2：ヴィサテップ・スクサバン（京都大学）

「Entrepreneurial Human and Social Capital in Vietnam's Small Businesses」

報告3：矢野剛（京都大学）

「Efficiency of Trade Credit and Bank Finances: An Ethnic Minority Area in China」

言語：日本語（第2報告は英語）

注：要旨・論文等は大会 website をご覧ください。

<http://www.jaas.or.jp/pages/convention/taikai-w.htm>

研究会幹事：

東南アジア研究所 三重野 mieno-lab@cseas.kyoto-u.ac.jp 075-753-7311

経済学研究科 矢野、経済学研究科 高野、経済学研究科 スックサバン

読後雑感：2014 年 第 19 回

21. NOV. 14

アジア・アパレルものづくりネットワーク代表理事

株式会社小島衣料オーナー

東アジアセンター外部研究員

小島正憲

1. 「図説“資源大国”東南アジア」
2. 「死に支度」
3. 「弔辞」
4. 「終活にハマる女たち 同じ墓には入らない」
5. 「定年後7年目のリアル」

1. 「図説“資源大国”東南アジア」 加納啓良著 洋泉社 2014 年 11 月 21 日

副題：「世界経済を支える“光と陰”の歴史」

帯の言葉：「豊富な資源を持つインドネシア、ベトナム、マレーシア—しかし開発による環境破壊にも注視せねばならない」

この本で著者の加納氏は、昨今、とかく「新たな生産拠点」・「消費市場」として注目されている東南アジアを、「資源大国」として再認識せよと主張している。この本からは、東南アジアを違う角度から見ることができ、学ぶものが多い。加納氏は、「21 世紀に入ると、2015 年に予定される“東南アジア共同体”結成を目指す動きが強まった。この経済統合の動向の中で、工業化の波は、遅れて ASEAN に加わった国々へも及びつつある。しかし、東南アジアの一次産品生産と輸出は、本当に歴史的役割を終えて舞台から消滅しつつあるのだろうか？」と問いを投げかけ、本文中で詳細な検討を加え、「全体として東南アジアの“一次産品”の生産と輸出は、消滅も後退もしておらず、むしろ大きく増加して、世界の経済発展にとり不可欠の“土台”を提供し続けている」と結論付けている。

さらに加納氏は、戦前から現在に至る過程で、3 つの大きな変化が起きていると指摘し、「第 1 の変化は、主要生産国の交代である。コーヒー栽培におけるベトナムの台頭、米輸出国の首位だったビルマからタイへの交代、砂糖輸出におけるインドネシア、フィリピンの凋落とタイの台頭、スズ輸出国の首位だったマレーシアからインドネシアへの交代、フィリピンのヤシ油輸出の凋落とマレーシア、インドネシアのパーム油輸出の大躍進、天然ゴム輸出国の首位だ

ったマレーシアからタイへの交代、などがその例である。第2の変化は、生産主体の変化と交代である」、「第3の変化は、輸出市場の変化である」と書いている。ことに第1の変化については、本文中で、それらが自然環境や政治環境によって、大きく左右されたことが詳述されており、たいへん参考になった。その一例を記しておく。

- ・ 東南アジアでコーヒーさび病が猛威を振るった。その上、1989年から1909年まで続いた輸出価格の低迷が、インドネシアやマレーシア、スリランカのコーヒー栽培を壊滅させた。
- ・ IR8は、インドネシアの在来優良品種と台湾の優良品種を掛け合わせた交配品種で、背丈が低くて倒伏が少なかった。早生種で非感光性のために2期作、3期作が可能であり、肥料反応が高かったため「奇蹟の米」と呼ばれてその優秀性が宣伝された。これをもとに各国の農業試験研究機関が独自に改良を加えた各種の高収量品種は、食糧増産政策の切り札として、東南アジア各国での導入と普及が奨励された。
- ・ 19世紀半ばごろから欧米でスズの需要が急増した理由は、缶詰産業の登場と発達によるところが大きかった。
- ・ 20世紀以降の電気・電子工業の発達、現在に至るまで世界のスズ需要を増大させることになった。インドネシア産のスズがなければ、世界のIT産業は成り立たないと言っても過言ではない。
- ・ 20世紀末の20年間に、それまで合成ゴムに押されてきた天然ゴムが、劣勢を跳ね返したのである。その理由は、第1に石油価格の値上がりによる合成ゴムの高騰である。第2は、天然ゴムは振動による発熱が少なく、繰り返し使っても疲労に強く劣化しにくいという特徴を持っている。第3に、自動車用タイヤ一般におけるラジアルタイヤの普及である。天然ゴムは、現代文明にとって依然不可欠の資源であり、かつても今も世界全体で生産される天然ゴムの8割以上が、タイヤ製造に使われていると言われる。
- ・ 1970年代からフィリピンのコプラ（ココナツの実から作られるもので、これからヤシ油が抽出される）の輸出量は急減し、2011年にはほとんどゼロになってしまった。その原因は、マレーシアなどで行われたアブラヤシ栽培の急拡大とそれを原料とするパーム油の大増産であった。

2. 「死に支度」 瀬戸内寂聴著 講談社 2014年10月30日

帯の言葉：「死に支度は、生き支度。今すべての世代へ送る、限りなく自由で温かい“死と向かい合う知恵”」

瀬戸内氏は「死に支度」と題したこの本で、「何しろ、92歳って、死の上に張った薄い氷の上に乗っているような感じなのです。これが最後の連載と称して書いてきた“群像”の“死に支度”を今月で終わりにします。本音を言えば、この小説を書いているうちに私は必ず死を迎えられて、この小説が今度こそ最後の作品となってくれるだろうと考えていたのです」、「私は“死に支度”を今月でやめます。ちょうど1年間、12か月書きました。どうやらまだ死にそうもなく、それでいて、今夜死んでも何の不思議もない私に愛想をつかして、“死に支度”なんて、小説の中でも、実生活の中でもやめようと決意しました」と書いている。

この本の表紙の帯には、「死と向き合う知恵」と謳ってあるが、本文中には瀬戸内氏の過去への追憶や、身の回りのお世話をしている若いお手伝いさんとの軽妙なやりとりが書き込まれているだけである。瀬戸内氏には、ぜひ、女性として、その体験上から、にじみ出るような「人生哲学」を「置き土産」として、書き残しておいてもらいたいものである。なお私は、瀬戸内氏が若きころ、北京に住んでいたこと、その縁で中国学者であり平和運動家の今堀誠二氏と深い交流があったことなどを初めて知った。以下に本書の参考箇所を列記しておく。

- ・ 子供時代から文学にかぶれていたせいか、短命で美しい詩や文を残して惜しまれて死んだ薄幸の文学者に憧れてさえいた。まさか自分が91歳の今まで生き続けようなどとは夢にも思わなかった。
- ・ 人間に自分の定命（じょうみょう）が知らされないのは恩寵だろうか、劫罰だろうか。
- ・ 紫式部の書いた横川の僧都は厳しい高僧ではなく、なつきやすい温顔のやさしい人物であった。生涯不犯の聖僧だが、当時の高僧には貴族の男女が、人には秘密の情事まで打ち明けている。罪の告白を書いた赤裸々な情事のことわりを、高僧は仏に報告し、罪の消滅を祈ってやる立場にある。
- ・ 正直に言えば、私はもうつくづく生き飽きたと思っている。わがままを通し、傍若無人に好き勝手に生き抜いてきた。ちっぽけな軀の中によどんでいた欲望は、大方私なりの満足度で発散してきた。最後のおしゃれに、確実に残されている自分の死を見苦しくなく迎えたい。人は自分の生を選び取ることはできないけれど、死は選ぶことが許されている。
- ・ どうせ死ねないのならば死ぬ日までペンを握って、机にうつ伏して死にたいと切望している。

- ・ まだ書きたい気持ちはあるものの、ようやく私の中の美意識が、これ以上書くのはみつともないと囁きだした。
- ・ 今、こうまで生きながらえて、何がうれしいかと言えば、小説を書くことだけである。どんな短いものでも、新しく産み出した小説が仕上がった時くらい全身に喜びが満たされることはない。
- ・ 近頃よく、老人の孤独死が取り上げられ、社会問題として論議されているが、誰にも気づかれずいつとも知れない定命を無視してひっそりと死んでいった人が気の毒だとばかりは評されないと思う。もう生き飽きていたかもしれないし、死ぬ瞬間は肉体的苦痛もあったかもしれないが、これで死ねると思ったとき、ほっとしていたかもしれないという想像も可能なのだ。
孤独死しても、家族に取り囲まれて惜しまれて死んでも、死という事態は同質であって、死に上下の点数はつけられない。

3.「弔辞」 文藝春秋 12月号特別企画

この特別企画には、「鮮やかな人生に鮮やかな言葉」と題した、著名人が著名人に送った弔辞が30人分集めてある。

葬儀が多く、弔辞を頼まれる人も多い昨今、タイムリーな企画である。弔辞は難しいものであり、あの名演説で有名なオバマ大統領でさえ、マンデラ氏への弔辞の冒頭で、「誰に対してであれ、弔辞を述べるというのは難しいものです」と述べている。

この企画には弔辞についての「鹿島茂氏と中江有里氏」の対談も組まれており、その中で中江氏は、「よい弔辞には誰にでもわかるエピソードと、二人にしかわからない秘話の二つが上手く入っていることが共通点」と話している。また鹿島氏は、「受け取った分を誰か分からない未来の人にいずれ返していきますよ、という宣言をしているものが良い弔辞だと思います。逆に言うとななたからこれだけもらったから、これだけあなたに返します、と二人の関係性だけで書かれたものは平凡なもので面白くない。どうもビジネス関係の人の弔辞には、その傾向が強いように感じます」と述べている。両氏の指摘とも、これからそのような機会があれば、参考にさせてもらおう。

多くの弔辞の中で、参考になったエピソードなどを以下に列記しておく。

- ・ 大島渚へ ← 田原総一郎

通常は、若い時代はエネルギーに燃え、見るものを立ちふるわせる作品を打ち出しても、中年以後になると分別が出てきて見るものを安

心させてしまう作品になるのですが、大島さんは、逆に年とともにより衝撃的な作品を出し続けました。怒りの塊のような人物でした。このような芸術家は前代未聞です。

- ・ 大賀典雄へ ← 橋本徹

私のかねがね、ソニーという世界的な大企業の経営者として、ご多忙な毎日を送っておられた大賀さんが、どのようにして、オーケストラの指揮まで完璧になされるのかと、不思議に思い、大賀さんに直接お尋ねしたことがあります。大賀さんのお答えは次の通りでした。「僕は、ソニーに入社したときから、会社の仕事と音楽という“2足のわらじ”を履くことを心に決めていた」。

- ・ 大鵬幸喜へ ← 白鵬

親方の言葉の中で、特に印象に残っているのが、私が横綱に昇進したときです。「横綱というのは、勝って当たり前、勝てなくなったら引退しかないのだ。私は横綱に昇進したと同時に引退のことを考えた」と言われた言葉です。

4. 「終活にハマる女たち 同じ墓には入らない」 Wedge11月号特集

この特集では、今、女性高齢者が活発に「終活」を行っているという。それは「女性の方が男性よりも寿命が長いため、しっかりと自分の最期を見据えている」からだという。そして「終活のなかでも、最近、大きな変化を見せているのが、“葬儀・墓”。クラブツーリズムでは、今年に入ってから終活ツアーをはじめた。樹木葬や散骨など、新しい葬送のあり方を体験してみるというコンセプトで、こちらの人気も高い。こうした葬儀・墓の特徴は、家族だけなど小規模で行われ、お墓も継承を前提としていないことだ」と書いている。さらに、「団塊の世代は、親を看取った最後の世代で、子供に看取られない最初の世代になる」、「身の回りを片付けられていなかった母親の姿。それを見て、自分が死ぬときは、片付けておこうと思っている」、「死を個人に委ね切るのではなく、社会で受け止める“死の社会化”の考えが必要」と述べている。

私自身が高齢者であり、超高齢者の介護をしているので、ここに書かれていることには、すべて納得がいく。しかし、今、必要とされているのは、「死生観の確立」である。残念ながら、この特集にも、それはまったく書かれていない。

5. 「定年後7年目のリアル」 勢古浩爾著 草思社文庫 2014年8月8日

帯の言葉：「“なにもしない”静かな生活はコシヒカリのような滋味がある。趣味やいきがいは、あってもいいし、なくてもいい」

この本も、「老人の繰り言」のような本である。本書は67歳を迎えた勢古氏が、「定年後7年」を経た生活実感や体験を綴ったものである。勢古氏は、「70歳近くまで、事故にも事件にも遭わず、大きな病気にもならず、なんとか生きてこられたというのは、ただの幸運ではないかという気がする。自分の力なんか微々たるもので、おれの力で生きてきた、なんて実感はほとんどない。最大の幸運は、やはり戦後の日本に生まれたことだろう。一番よかったことは、端的に戦争がなかったことである。飢餓もなく、国を二分するような政治的政争もなかった」と書き、日本に生まれたことをよかったと実感している。しかし、その背景には、反戦勢力の大きな貢献があったことや、政府が1000兆円を越す莫大な借金を抱えていることについて、まったく言及していない。そして「私の定年後の原則は、なにをしてもいいし、なにをしなくてもいい」とであると、能天気なことを書いている。

勢古氏はNHKの高齢者番組の中でのコメンテーターの、「なにか有益なことをし、人生を楽しむ積極的な人間ほど価値があり、なにもしない消極的な人間の人生は“ただ死を待つだけ”の無価値。家でブラブラしているのは、社会的損失」という発言を取り上げ、「大きなお世話だ」と毒づいている。今、私や勢古氏も含めて団塊の世代は、その存在そのものが社会のお荷物になりつつある。長寿が敬われた時代は、すでに過ぎ去った。現代には、「無為の老人」を甘やかす、生かし続ける余裕はない。青・壮年期にいかなる社会貢献をしていても、団塊の世代は自らの存在を、「社会悪」とまでは位置づけなくてもよいが、少なくとも「社会善」ではないと自覚すべきである。私は、勢古氏のような「なにもしないことを楽しむ」という生活態度を標榜することは、まさに「社会悪」そのものだと考える。勢古氏のような「思想を云々することを生業」としてきた人間こそ、積極果敢に「早死」に挑まなければならないのではないだろうか。

以上

上海街角インタビュー ⑤⑥

社団法人大阪能率協会アジア・中国事業支援室副室長（海外委員）

順利包装集団董事（在上海）

福喜多技術士事務所所長

福喜多俊夫

ファストフード店で食器を自分で下げますか？

2002 年に上海で住むようになった頃、マクドナルドやケンタッキー・フライドチキン、あるいはスターバックスで飲食したあとの食器を返却棚に持っていく客は殆どいなかった。

最近は片付ける客もちらほら見られるが、それでも、そのままにして席を立つ人が圧倒的に多い。空港では 99%がそのまま席を立つ。

上海人の意識はどうなっているのだろうか？

1. 私のスタバでの観察

上海古北新地のスタバに 10 月のある日曜日、10 時から 12 時まで 2 時間ねばって観察した。1 階に 5 席くらい、2 階に 30 席以上ある大型店である。2 階で観察したが、6 割位の人が返却棚に戻っていた。店員が定期的に巡回して、置きっぱなしの食器を片付けていたが、新しい客は座りたい席に食器が残っていると、隣の席に移し、その席は何組もの食器が積み重なることになった。この地区は外国人が多いこともあって返却率が高いと思われる。

2. 私のマックでの観察

南京西路、人民広場の近くのマックで同じ日曜日の夕方、混みあっていたので 30 分程観察した。8 割位の人がトレーをそのままにして席を立った。フロアー係が常時巡回し、すぐ片付けるので、次の客はきれいな席に着くことができ、床もきれいに掃除されていた。マックは先日の上海福喜食品の食肉汚染の被害をもろに受け、客離れが起こったのでサービスに気を付けているようである。

3. 50 歳代前半の男性

中国人はマックや KFC などでは自分では片付けません。昔から中国食のファストフード店ではセルフサービスの習慣はないから、マックや KFC でも同じです。日本へ出張したときマックの店で誰もが自分で片付けているのを見てびっくりしました。私はマックなどにはあまり行きませんが、日本出張以来、自分で片付けるようにしています。

中国人で、自分で片付ける人がいたら外国旅行の経験者でしょう。

4. 20 歳代後半の女性

私は片付け派とそのまま派の中間です。上海のマックや KFC は片付け係がいるので、自分で片付ける必要はないです。でも、セブンイレブンの飲食コーナーは片付け係がいないので、私は自分でゴミ箱へ入れに行きます。中国の大部分のファストフード店は自分で片付ける雰囲気を作られていません。片付け係がいるから自分で片付ける必要はないでしょう。

5. 40 歳代前半の男性

1 人でマックや KFC に入ることはありませんが、娘とは時々行きます。私は必ず自分で片付けるようにし、娘にもやらせています。こういうことは小さい時からしつけなくてははいけません。中国のファストフード店で店員が片付けるシステムになっているところでは自分で片付けません。

6. 20 歳代前半の女性

マック、KFC、スタバは大学の友人達とよく行きますが、誰も自分で片付けませんよ。でも、外国旅行では自分で片付けます。中国は片付け係がいる国、日本やアメリカはいない国。私もちゃんと使い分けています。

7. 30 歳代中頃の女性

私は片付けます。日本商社に勤めているので、日本人の習慣が私も身につきました。

8. 40 歳代前半の男性

私はスタバ以外では片付けません。マックや KFC は片付け係がいる

から自分で片付ける必要はないです。

9. 40 歳代中頃の女性

自分で片付けたり、しなかったり。お店の雰囲気判断して行動します。

10. 20 歳代前半の男性

自分で片付けたことはないですね。よその国は知らないけれど中国では片付けないのが習慣です。

インタビューの結果、片付けるのは少数派で、大部分の人は片付けないと答えた。これは上海人の文明度が低いというわけではなく、単に中国ではファストフード店でも自分で片付ける習慣がないというだけのことであろう。上海のサービス業は今、人不足に悩んでいる。マックもスタバもセルフサービスを徹底しないとやって行けなくなる日が来るのはそう遠くないと思う。

以上



【中国経済最新統計】

	① 実 質 GDP 増加率 (%)	② 工 業 付 加 価 値 増 加 率 (%)	③ 消費財 小売総 額増加 率(%)	④ 消費者 物価指 数上昇 率(%)	⑤ 都市固 定資産 投資増 加 率 (%)	⑥ 貿易収 支 (億ドル)	⑦ 輸 出 増加率 (%)	⑧ 輸 入 増加率 (%)	⑨ 外国直 接投資 件数の 増加率 (%)	⑩ 外国直 接投資 金額増 加率 (%)	⑪ 貨幣供 給量増 加 率 M2(%)	⑫ 人民元 貸出残 高増加 率(%)
2005 年	10.4		12.9	1.8	27.2	1020	28.4	17.6	0.8	▲0.5	17.6	9.3
2006 年	11.6		13.7	1.5	24.3	1775	27.2	19.9	▲5.7	4.5	15.7	15.7
2007 年	13.0	18.5	16.8	4.8	25.8	2618	25.7	20.8	▲8.7	18.7	16.7	16.1
2008 年	9.0	12.9	21.6	5.9	26.1	2955	17.2	18.5	▲27.4	23.6	17.8	15.9
2009 年	9.1	11.0	15.5	▲0.7	31.0	1961	▲15.9	▲11.3	▲14.9	▲16.9	27.6	31.7
2010 年	10.3	15.7	18.4	3.3	24.5	1831	31.3	38.7	16.9	17.4	19.7	19.8
2011 年	9.2	13.9	17.1	5.4	24.0	1549	20.3	24.9	1.1	9.7	13.6	14.3
2012 年	7.7	10.0	14.3	2.7	20.7	2303	7.9	4.3	▲10.1	▲3.7	13.8	15.0
2 月		21.3		3.2	—	-315	18.3	40.3	38.7	-0.9	17.8	15.0
3 月	8.1	11.9	15.2	3.6	21.1	53	8.8	5.4	-6.5	-6.1	18.1	15.7
4 月		9.3	14.1	3.4	19.2	184	4.9	0.4	-26.1	-0.7	17.5	15.4
5 月		9.6	13.8	3.0	21.0	187	15.3	12.7	-6.1	0.0	17.9	15.7
6 月	7.6	9.5	13.7	2.2	21.8	317	11.3	6.3	-16.3	-6.9	18.5	16.0
7 月		9.2	13.1	1.8	20.6	251	1.0	5.7	-7.8	-8.6	18.9	16.0
8 月		8.9	13.2	2.0	19.4	267	2.7	-2.7	-12.7	-1.4	18.4	16.1
9 月	7.4	9.2	14.2	1.9	23.1	277	9.8	2.3	-6.4	-6.8	19.8	16.2
10 月		9.6	14.5	1.7	22.4	320	11.5	2.2	1.8	-0.2	14.6	15.9
11 月		10.1	14.9	2.0	20.0	196	2.8	-0.1	-8.7	-5.4	14.5	15.7
12 月	7.9	10.3	15.2	2.5	18.8	316	14.0	6.0	-7.8	-4.5	14.4	15.0
2013 年	7.7	9.7	11.4	2.6								14.1
1 月				2.0	20.8	291	25.0	29.0	-12.4	-3.4	15.9	15.4
2 月				3.2		153	21.7	-14.9	-35.6	6.3	15.2	15.1
3 月	7.7	8.9	12.6	2.1	21.5	-9	10.0	14.2	-19.7	5.7	15.7	14.9
4 月		9.3	12.8	2.4	19.8	182	14.6	16.6	13.9	0.4	16.1	14.9
5 月		9.2	12.9	2.1	19.7	204	0.9	-0.1	-14.4	0.3	15.8	14.5
6 月	7.5	8.9	13.3	2.7	19.9	271	-3.3	-0.9	-17.3	20.1	14.0	14.1
7 月		9.7	13.2	2.7	20.2	178	5.1	10.8	1.2	24.1	14.5	14.3
8 月		10.4	13.4	2.6	21.4	285	7.1	7.1	-11.7	0.6	14.7	14.1
9 月	7.8	10.2	13.3	3.1	19.6	152	-0.4	7.4	-16.8	4.9	14.2	14.3
10 月		10.3	13.3	3.2	19.2	311	5.6	7.5	-8.2	1.2	14.3	14.1
11 月		10.0	13.7	3.0	17.6	338	12.7	5.4	-9.3	2.3	14.2	14.2
12 月	7.7	9.7	13.6	2.5	17.2	256	4.3	8.6	-3.4	-42.6	13.6	14.1
2014 年												
1 月				2.5	19.8	319	10.5	10.8	-8.6	-4.5	13.2	14.3
2 月				2.0		-230	-18.1	10.4	1.3	4.0	13.3	14.2
3 月	7.4	8.8	12.2	2.4	17.3	77	-6.6	-11.3	6.1	-1.5	12.1	13.9
4 月		8.7	11.9	1.8	16.6	185	0.8	0.7	0.5	3.4	13.2	13.7
5 月		8.8	12.5	2.5	16.9	359	7.0	-1.7	8.4	-6.6	13.4	13.9
6 月	7.5	9.2	12.4	2.3	17.9	316	7.2	5.5	10.3	0.2	14.7	14.0
7 月		9.0	12.2	2.3	15.6	473	14.5	-1.5	14.0	-17.0	13.5	13.4
8 月		6.9	11.9	2.0	13.3	498	9.4	-2.1	5.2	-14.0	12.8	13.3
9 月		8.0	11.6	1.6	11.5	310	15.1	7.2	9.4	1.9	11.6	13.2
10 月		7.7	11.5	1.6	13.9	454	11.6	4.6	8.7	1.3	12.1	13.2

- 注：1. ①「実質 GDP 増加率」は前年同期（四半期）比、その他の増加率はいずれも前年同月比である。
2. 中国では、旧正月休みは年によって月が変わるため、1 月と 2 月の前年同月比は比較できない場合があるので注意されたい。また、（ ）内の数字は 1 月から当該月までの合計の前年同期に対する増加率を示している。
3. ③「消費財小売総額」は中国における「社会消費財小売総額」、④「消費者物価指数」は「住民消費価格指数」に対応している。⑤「都市固定資産投資」は全国総投資額の 86%（2007 年）を占めている。⑥—⑧はいずれもモノの貿易である。⑨と⑩は実施ベースである。

出所：①—⑤は国家统计局統計、⑥⑦⑧は海関統計、⑨⑩は商務部統計、⑪⑫は中国人民銀行統計による。